

# 教育委員会会議録

令和4年(2022年)5月定例教育委員会会議

開 会 日	令和4年(2022年)5月26日(木)	
開 会 時 間	午後2時00分 ~ 5時15分	
開 会 場 所	教育センター 4階 大研修室	
出 席 者	委員 会	遠藤洋路 教育長 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員 澤栄美 委員
	事務 局	松島孝司 教育次長 中村順浩 教育総務部長 田口清行 学校教育部長 他
提 出 議 案	<p>議第29号 令和4年度熊本市一般会計補正予算(6月補正予算)について</p> <p>議第30号 熊本市体罰等審議会委員の委嘱について</p> <p>議第31号 千原台高等学校におけるスクール・ミッションの策定について</p> <p>議第32号 熊本市立図書館協議会委員の委嘱について</p> <p>議第33号 熊本市立図書館設置条例施行規則の一部改正について</p> <p>議第34号 熊本博物館協議会の委員の委嘱について</p> <p>議第35号 熊本市立高等学校学則の一部改正について</p> <p>議第36号 熊本市立総合ビジネス専門学校学則の一部改正について</p> <p>議第37号 熊本市立総合ビジネス専門学校の管理運営に関する規則の一部改正について</p> <p>議第38号 熊本市奨学生の採用について</p> <p>議第39号 熊本市就学支援委員会委員の委嘱について</p> <p>議第40号 熊本市教育の情報化検討委員会の委員の委嘱について</p> <p>議第41号 職員の懲戒処分について</p>	
報 告	<p>(1) 熊本市立幼稚園まなび創造プログラム(案)について</p> <p>(2) 市立高等学校・専門学校改革について</p> <p>(3) 「第2期 学校改革!教職員の時間創造プログラム」における令和3年度実績報告及び今後の取組について</p> <p>(4) 「令和3年度生徒指導状況報告」の結果報告について</p>	
自 由 討 議	(1) 働き方改革の推進と教職員のメンタルヘルスについて	
署 名	出川 聖尚子	
	小屋松 徹彦	
会議録作成者	教育政策課 玉野あゆみ	

<p>〔開会の宣告〕 遠藤洋路 教育長</p> <p>〔会議の成立〕 遠藤洋路 教育長</p> <p>〔公開の審議〕 遠藤洋路 教育長</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>令和4年5月定例教育委員会会議を開会いたします。</p> <p>本日は、私の他5人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。</p> <p>会議録署名人は、出川委員と小屋松委員とします。</p> <p>本日の会議の内容につきましては、会議日程のとおりですが、招集通知後に追加で協議をお願いしたい案件が発生したため、案件を追加しております。当該案件は、第41号 職員の懲戒処分についてです。また、本日の議事のうち、議第41号 職員の懲戒処分については、会議規則第13条第1号「教育委員会に属する職員の任免その他の身分取扱に関する案件」の非公開事由に該当すること、議第29号 令和4年度熊本市一般会計補正予算（6月補正予算）については、「教育予算その他議会の議決を経るべき議案についての意見の申出に関する案件」に該当することから、会議規則第13条第1号及び第2号の非公開事由に該当し、非公開の審議が適当と思っておりますがいかがでしょうか。</p> <p>議第29号及び議第41号につきまして、非公開に賛成の委員は、挙手をお願いします。</p> <p style="text-align: center;">（全員挙手）</p> <p>全員賛成により、議第29号及び議第41号は、非公開とします。</p>
<p>日程第1 前回来議録等承認</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>4月28日開催の令和4年4月定例教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録を承認することに、ご異議はありませんか。</p> <p style="text-align: center;">（異議なしの声）</p> <p>異議なしと認め、前回来議録等を承認することに決定します。</p>

日程第2 事務局報告の件

(1) 事業・行事等報告について

- 前回定例会議（R4.4.28）以降の事業・行事報告
- 今後の予定

日程第3 議事

- ・議第30号 熊本市体罰等審議会委員の委嘱について

《倉橋徹也 教育政策課審議員 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・議第32号 熊本市立図書館協議会委員の委嘱について

《大谷修一郎 熊本市立図書館長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・議第33号 熊本市立図書館設置条例施行規則の一部改正について

《大谷修一郎 熊本市立図書館長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・議第34号 熊本博物館協議会の委員の委嘱について

《竹原浩朗 熊本博物館長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

日程第4 報告

・報告（2）市立高等学校・専門学校改革について

《松永直樹 学校改革推進課長 報告》

遠藤洋路 教育長

では、本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

西山忠男 委員

まず、千原台についてお尋ねいたします。校長先生が随分ご苦労なさって、まとめてこられたんだろうと思います。校長先生の改革案がそのまま通らずにこういう形になったということですが、結局問題だったのは情報ビジネスの教員が確保できるかということ、それから、校長先生の提案の場合は、逆に健康スポーツの生徒を確保できるかということです。この2つのどちらを取るかという話だったんだろうと思うんですけど、最終的にスポーツ探究科が40人1クラスになった最大の決め手は何だったんでしょうか。校長先生の教員との対話の過程についてご説明いただければと思います。

南弘一 千原台高等学校  
校長

今お尋ねがあったとおり、校長といたしましては、職員が不足するのではないかとこのところを非常に危惧いたしまして、このような提案をさせていただきました。

校内で学校案としてこれを取りまとめるに当たりまして、まずは魅力づくり部主催の職員研修でグループワークを行いました。それぞれの案のメリット・デメリット、そして解決策を全員で出し合いました。

その前にも一度事前調査でアンケートを取っておりましたが、研修後にもう一度アンケートを取りました。

そのアンケートも踏まえて、私が決断しようと考えましたが、いま一度、私としては当然2クラス、3クラス案のほうが望ましいという考えを持っておりましたので、私の思いをもう一度伝えました。そのうえで、再度アンケートを取りました。そのアンケートの結果、やはり4クラス、1クラスという案が約7

	<p>割、私の提唱した案に賛同するのが約3割という結果になりました。</p> <p>私はその話合いをしてとてもよかったと思うのは、話合いの過程において、どちらの案にもメリット・デメリットがありますが、そのデメリットを解決するためにこういうことが必要だ、こういうことを私たちはしていかなければならないということを真剣に意見を出してもらいました。最終的には私の案と違う案が支持を受けましたけど、決定後は全員で一致団結してしっかり実践していくという共通理解のうえで、学校案としては、私の校長案を取り下げ、もともとの資料にある案で意見をまとめさせていただいたものでございます。</p>
西山忠男 委員	分かりました。
遠藤洋路 教育長	他にご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。
西山忠男 委員	もう一ついいですか。
遠藤洋路 教育長	はい、どうぞ。
西山忠男 委員	カリキュラム・ポリシーの中に、細かいことですが、「日商簿記などの資格取得に取り組む」と書いてございますが、日商簿記の何級を取るという目標なんでしょうか。
南弘一 千原台高等学校 校長	現在、3級を授業の中で取り組んでおります。2級につきましては、授業の範囲内では難しいところもありますが、将来的には授業の範囲内で2級まで取り組めたらいいなという希望は持っております。
西山忠男 委員	せっかく改革をして探究的な学習を取り入れるということなので、少し高いところを目指して努力していただきたいと思います。千原台に行けば日商簿記の2級が取れると評判になれば、また進学者も増えると思いますので、ぜひ頑張ってくださいと思います。
遠藤洋路 教育長	では、他にご発言があればお願いいたします。
苫野一徳 委員	必由館高校についてお伺いしたいんですけど、以前に学校提

松永直樹 学校改革推進  
課長

案で出していただいたものが、現行ととても変わっているというわけではないわけですね。これを今後どのように協議を進めていく予定になっているのかということをお伺いしたいと思います。また、教育委員会案との乖離がとても大きいと思うので、そこをどのように進めていくのかについて、説明をお願いできますでしょうか。

委員お尋ねの点につきましては、資料7ページに、令和3年5月に報告しました事務局案、昨年11月にご提案がございました学校提案を載せておりますが、この他にも教職員の案として、新たな普通教育を主とする学科、新しい普通科についても提案がなされたところでございます。

基本的にはこの事務局案、学校提案、教職員提案の3つの案をベースに議論を重ねております。

特段タブーを設けず議論をしておるところでございますが、最終的に学校案としては普通科という形で提案がなされておりますが、我々としては融合案を含めて検討したいと考えております。先ほども申し上げましたが、新しい普通教育を主とする学科、これは文科省が普通科改革を進めているうえで打ち出しているものでございますが、こういったものも含めまして検討してまいりたいと、現状では考えているところでございます。

遠藤洋路 教育長

よろしいですか。

他にご発言はありますか。

では、他にご発言がなければ、本件は以上といたします。

### 日程第3 議事

- ・議第35号 熊本市立高等学校学則の一部改正について

《上村奈津子 指導課副課長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・議第36号 熊本市立総合ビジネス専門学校学則の一部改正について

《上村奈津子 指導課副課長 提出理由説明》

遠藤洋路 教育長

では、本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

西山忠男 委員

前に説明していただいたことを忘れていたので再度お尋ねしますが、一般課程を廃止する理由は何だったのでしょうか。

松永直樹 学校改革推進課長

基本的なイメージとしては、昼夜開講制でございます。これまで夜間に設けておりました一般課程につきましては、1日3時間の週5日という時数を受けることにしておりました。

今回我々が想定しておりますのは、聴講生や科目等履修生を設けることによりまして、社会人を含めた自由度の高い、生徒の興味・関心に応じた自由な選択ができるような学校にしたいということでこのような提案をさせていただいているところでございます。

西山忠男 委員

分かりました。

遠藤洋路 教育長

他にありませんか。

他にご発言がなければ、採決を行います。

議第36号 熊本市立総合ビジネス専門学校学則の一部改正について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。

（異議なしの声）

遠藤洋路 教育長

ご異議なしと認めます。

議第36号については原案のとおり決定いたします。

・議第37号 熊本市立総合ビジネス専門学校の管理運営に関する規則の一部改正について

《上村奈津子 指導課副課長 提出理由説明》

〔採決〕

【原案どおり承認された】

・議第31号 千原台高等学校におけるスクール・ミッションの策定について

《松永直樹 学校改革推進課長 提出理由説明》

遠藤洋路 教育長

では、本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

西山忠男 委員

このスクール・ミッションが非常に読みにくくて分かりにくいという印象を受けます。よくこういう文章を書くんですけど、例えば最初の段落、2行目の「高校として」から最後の「リーダーを育成します」という構造になっているんですが、その間に「多様な価値観を尊重する態度や新たな価値を創造する意志を備え、情報・ビジネス・健康・スポーツに関する高い専門性を活かし、熊本市の未来を拓くリーダー」、リーダーの説明がものすごく長いわけです。ですから、最初から読んでいくと何を言っているのかさっぱり分からないという文章の構造になっているんです。もう少しきれいに文章を整理しないと、主語と述語の関係が非常に分かりにくい。とにかくリーダーに対する修飾の部分が長過ぎて分かりにくいという、これが第1点です。

第2段落目、ここはさらに分かりにくいです。主語が何になるのでしょうか。「社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出し、自己の興味関心に応じた学びを探究的に進めることを通して、生涯にわたって学び続ける力を育むことを目指します」、育むのは誰が育むのか。多分高校が育むんだと思うんですけど、その前の文章は、「社会に関する理解を深め」というのは生徒が自分で深めるわけですね。次の文章も「魅力を見出す」のは生徒ですね。次の文章も「探究的に進める」のは生徒ですね。というふうに、そこまで生徒が主語だと思えるような文章が続いていて、最後は高校が主語だと思えるような文章になっている。とても分かりにくく、複雑な文章構成になっていると思います。もう少し日本語としてきれいに整理していただきたいんですけど、いかがでしょうか。

松永直樹 学校改革推進  
課長

申し訳ございません。検討する過程においては、そういった意見は出ておりませんでした。おっしゃられるとおりの課題

	<p>はあろうかと思います。</p> <p>現時点におきましては、3段落の項目において、それぞれ何を言っているのかというものについて、リード文を設けるというようなことも考えております。これは県立高校が先んじてスクール・ミッションを公表しておりますが、それに準じて、生徒が比較・検討しやすいようにするため、そういった出し方も検討しているところでございます。</p> <p>主語と述語の関係のご指摘等につきましては、正直これまでの議論の中で、検討していませんでしたが、もし、案がございましたら、ぜひご教示いただけたらと考えているところでございます。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>今すぐというのは難しいですね。相当時間をかけて練り直さないといい文章にはならないと思うんです。</p> <p>こういう文章を掲げても美辞麗句で終わってしまっただけでは誰も読まなくなるとお思いますので、もう少し明確な文章にしないと本当のスクール・ミッションにはならないんじゃないかなと思うんです。</p> <p>再度検討することをお勧めいたします。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>ご指摘の点を踏まえまして、再度検討させていただければと思いますが、記載の内容といたしますか、価値観を含めまして、これは基本計画から持ってきております。その部分については特段問題がないという理解でよろしいでしょうか。あとは読みやすくすることや主語と述語の関係をきちんと整理すること、そういったご指摘ということでもよろしいでしょうか。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>内容について文句をつけているわけではなくて、先ほど言いました日本語としての明確性について整理してほしいとお思いますので、それは私も協力いたします。ぜひ一緒に案を作成し直しましょう。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>それでは、改めまして案を事務局内で練り直しまして、再度提出をさせていただきたいと考えます。</p>
<p>苫野一徳 委員</p>	<p>質問なんですけど、今のことに関して、スクール・ミッションは箇条書というようなやり方はあまりそぐわないんでしょうか。もし可能なのであれば、非常に分かりやすくなるんじゃないかな</p>

松永直樹 学校改革推進課長	いかなと思ったんですが。  記載の方法について、特に定めがあるわけではございませんので、当初の検討では箇条書も案として出しておりました。そういったものも含めまして、改めて検討を進めてまいりたいと思います。
澤栄美 委員	作り直しがあるならということで、ちょっと質問です。PBL学習はプロジェクト・ベースド・ラーニングだと思うんですけど、PBL学習って通常使いますか。プロジェクト学習またはPBLと言うような気がするんです。もし通常使用しているなら大丈夫ですが、そうでないなら訂正可能かなと思って質問しました。
松永直樹 学校改革推進課長	委員ご指摘の部分については、PBL学習というふうに載せております。これは学校からの提案を受けて盛り込んだ表現でございますが、分かりづらい文言についても、改めまして事務局で議論したいというふうに考えます。
澤栄美 委員	ありがとうございます。自分の中でラーニングと学習って一緒だよねと思ったので、ちょっとお尋ねしました。普通に使われているのであれば大丈夫だと思います。
遠藤洋路 教育長	確かにプロジェクト・ベースド・ラーニングなのであれば、ラーニングと学習はダブっていますから、「頭痛が痛い」みたいなことになりますね。内容というよりは文章的な整理を含めて一回見直しをするということで話を進めましょう。 他によろしいですか。 では、本件については、再度検討して、また改めて議案として提出するという事によろしいですか。 では、本件は以上といたします。
・議第38号 熊本市奨学生の採用について	
《上村奈津子 指導課副課長 提出理由説明》	

遠藤洋路 教育長	では、本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。
西山忠男 委員	充足率の計算について再度説明をお願いします。
上村奈津子 指導課副課長	充足率につきましては、資料の2ページ目、2、経済的理由の選考基準の（2）充足率のところにございます。所得基準額が生活保護基準額の1.7倍となっております。この1.7倍を分母に、申請者の方の所得合計を分子としまして、出した数字が充足率となっております。この充足率が1以下の対象者を順位付けいたしまして、奨学生の採用を判断しております。
西山忠男 委員	分かりました。
遠藤洋路 教育長	他にご発言はありますか。よろしいでしょうか。 では、他にご発言がなければ、採決を行います。 議第38号 熊本市奨学生の採用について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。
	(異議なしの声)
遠藤洋路 教育長	ご異議なしと認めます。 議第38号については原案のとおり決定いたします。
・議第39号 熊本市就学支援委員会委員の委嘱について	
《野田建男 特別支援教育室長 提出理由説明》	
遠藤洋路 教育長	では、本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。
西山忠男 委員	本市就学支援委員会のミッション、役割、仕事は何でしょうか。もう一度教えてください。
野田建男 特別支援教育室長	就学支援委員会につきましては、就学前のお子さん方の適切な就学の場につきまして、また、今在籍していらっしゃるお子

	<p>さん方の特別支援学級や通級指導教室への転籍など、そういった審議を行う場でございます。</p> <p>子どもたちにとりまして、よりよい集団、また指導の場を委員の先生方にご意見をいただきまして、その意見を参考にして教育委員会が決定するというふうなことで進めています。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>個々の生徒さんあるいはお子さんについて、個々に判断することなんでしょうか。</p>
<p>野田建男 特別支援教育室長</p>	<p>一人一人を丁寧に判断しております。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>でも、直接そのお子さんと接しているわけではないですよね。そこに判断の難しさが生ずるような気がするんですけど、それに対してはどのような工夫をしておられるんですか。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>基本的な仕組を少しご説明いただけますか。</p>
<p>野田建男 特別支援教育室長</p>	<p>まず、学校と保護者の方、また本人と相談をいたしまして、保護者と本人との合意形成の下に、学校から資料が上がってまいります。</p> <p>もう一つは、あいばる、教育相談室でお子さんが保護者の方と検査を行い、そこでじっくり相談を受け、審議資料が上がってまいります。その2つのものを専門家の方々に見ていただいて、そこで判断をしていくというふうな過程で進めています。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>しつこいようで恐縮ですけど、ご家族や本人の希望とここでの決定が食い違った場合には、どういうふうになさっているんですか。</p>
<p>野田建男 特別支援教育室長</p>	<p>食い違いがないように、まず学校で合意形成を図ります。そして、間違いがないかどうかを、教育相談室でもう一度確認をしております。最終的に就学支援委員会での決定との食い違いがあった場合には、総合支援課と保護者の方とでお話をして、それが難しい場合には保護者の方の希望を優先して決定しているというふうなところでございます。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>分かりました。</p>

<p>苫野一徳 委員</p>	<p>教育振興基本計画にもインクルーシブ教育の充実というようなものが入っていたかと思うんですけど、そういった観点がどれぐらいこの審議の中で重視されて、そのような環境を整えるということを目指されているのか、現状をお聞かせいただけますでしょうか。</p>
<p>野田建男 特別支援教育室長</p>	<p>今のご質問につきましては、しっかり保護者の方から要望をお伺いして、就学支援委員会で専門家の皆様の一つ一つ検討いただきます。保護者の方々の要望につきましては、学校でも受けておりますので、いろんな施設の問題であるとか、また、指導の要望でありますとか、そういったものも全て審議資料の中に含めてあります。それを踏まえたうえで、そして、個別対応につきましては直接私たちがお話をお伺いして、できる限りそこにお応えできるような努力をしていくというかたちで進めています。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>今の件は、保護者の要望でインクルーシブといいますか、それを受けたいという要望があったときにどういう対応をするかということも当然あると思います。一方で、教育委員会としてインクルーシブを推進していくということ、特別支援学級をどんどん増やすんじゃなくて、できるだけ通常学級あるいは通級という方向も検討して、可能な場合にはそれを進めていくということだと思います。それがこの就学支援委員会の審議に反映されているのかどうかという点かと思うんですが、どうでしょうか。</p>
<p>野田建男 特別支援教育室長</p>	<p>委員会としても、そういったインクルーシブを進めるという方向で取組を進めているところでございます。その中で、まず、ご家族のご意見、それから本人の意見が一番尊重されるべきです。ご要望をしっかり受け止めて、それを踏まえてご審議いただくようお願いをしているところです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>ですから、保護者の意見はそうなんですが、この委員さんたちができるだけインクルーシブという方向を理解のうえで審議されているのかどうかということですよ。</p>

野田建男 特別支援教育  
室長

そのとおりでございます。就学支援委員会が始まる時に、  
そういった話もちっとお伝えしたうえで審議をいたします。

苫野一徳 委員

ありがとうございます。

これは本市の話ではないんですけど、特別な支援を要するお  
子さんの保護者の方々とお話をして、支援学級ではなく、通常  
学級でみんなと一緒に学びたいんだという要望を持った保護者  
の方も、結局できなくて支援学級を勧められるという話はとて  
もよく聞くんです。

熊本市はICT先進となりましたし、いわゆる個別最適な学  
びと協働的な学びの一体的な充実というようなことに関しても  
非常に先進的に進められる市だと思います。

ですので、クラスの中で多様な子どもたちがいて、なお共に  
学び合いながら、しかも個別に学ぶこともできるような、そう  
いった環境を進めるということ、いかにインクルーシブの環境  
をつくっていくかというところをかなり本気でフォーカスし  
て、連携しながら議論を進めていく必要があるのかなと思いま  
す。

今の現状がこうだから、保護者の方のご要望を聞いて、もう  
難しいとなってしまうことがあると思いますし、また、逆に保  
護者の方が一緒に学べるんだという発想がそもそもないという  
場合もあると思うんです。だから、上手に連携しながら環境を  
整えていけたらいいなというふうに思っていますので、そこを  
ぜひ検討、推進いただければありがたいなというふうに思いま  
す。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございました。

保護者が通常学級を望まれて、専門的に見て特別支援のほう  
が適切だと思えば特別支援学級を勧めるということはあると思  
いますが、最終的には無理やりということじゃなくて、よく協  
議したうえで保護者の意向を尊重して決めるということですよ  
ね。

ただ、逆に保護者が特別支援学級を望むというケースも、実  
際にはかなりありますよね。その保護者の意向を尊重していく  
と、今後もどんどん特別支援学級が増えてしまうということに  
もなるわけですけど、それについては何かバランスを取る方策  
というのはあるんですか。

野田建男 特別支援教育  
室長

今、これが一番大きな課題になっているところがございます、とにかく特別支援学級がどんどん増えているということです。

それについて、今後どうしていこうかということ、室でもしっかり考えているところございますが、文科省もできる限り通常学級で学ぶことが基本ということを出しておりますので、インクルーシブ教育の視点から通常学級で学ぶということ、を基本とすることを、まず学校がしっかり受け止めて、ちょっとうまくいかないから特別支援学級というわけではなく、しっかり学校で教育相談や通常学級で学べるような工夫などを意識しながらやっていく、その支援を教育委員会として行っていかなければいけないかなというふうに思っています。

また、保護者の方々につきましても、やはり気持ちとしては通常学級で学びたい、でもやっぱり難しいということで特別支援学級を選択される方がいらっしゃるんですが、その間に通級指導教室というものもありますし、学校の中の資源を利用しての学習というものもありますので、そういった学校の中の体制整備も、これから提案していこうかなと思っているところがございます。

松島孝司 教育次長

最後に室長からあった通級指導教室の件ですが、実際ここ数年、少しずつではありますが、通級指導教室を新設しています。新設した学校に状況をお聞きすると、とても効果があるということで、認知が高まっているところです。

ふだんは通常学級で学び、みんなと一緒にだけど、ポイントで個別の指導を行い、特に対人関係等のスキルを学ぶことは大きな効果があると認識していますので、今後もそこは充実させていく必要があると思います。

澤栄美 委員

ちょっと重なるところがあると思うんですけど、以前、就学支援委員会の委員を1年間だけ務めさせていただいて、非常に特別支援学校や学級の希望が多いなと思いました。入れなかったほうが多いという印象があったんですけど、障がいといっても軽いものから重いものまで種類もいろいろあるので、インクルーシブな教育ができるためには、いろいろなパターンを考えなければいけないと思うんです。

今ちょうど言われたように、私は通級指導教室がすごくいいなと思っていて、学校に勤務していたときにも通級教室の役割

	<p>が非常に大きいと思っていたんです。</p> <p>広島県の福山市で、何年か前に通級指導という言葉ではなかったんですけど、校内フリースクールというかたちの仕組みが始まったということでした。その後、広島県で広がっているということで、インクルーシブの視点で学校の中にそういう対象の子どもがいる場所があるというのも一つの考え方です。学校の中にそういう場があって、その子に応じて、通常教室と通級教室を行き来できるという考え方は非常にいいなと思うんです。</p> <p>別のところに置くという考え方じゃなくて、フィールドは同じところにあって、その子の状態に合わせていくというようなかたち、そういった校内フリースクール的な考え方は、熊本市に取り入れていただければいいなというふうに考えています。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。</p> <p>今の議論を聞きながら思ったんですけど、特別支援学級か通常学級かということに加えて、通級指導教室という選択肢もある。保護者の方は、通級という選択肢に関してどのぐらいご存じなのか。あるいは保護者の方に対してどのぐらいそれを周知したうえで希望を聞いているのかということのを少し教えていただけますか。</p>
野田建男 特別支援教育室長	<p>この認知度については、学校から保護者の方に、学びの場は通常学級、通級指導教室、特別支援学級、特別支援学校、こういったものがありますよということをきちんとご説明しないと、全ての学校にあるわけではございませんので、なかなか伝わっていないというのが現状だと私は思っております。</p> <p>そのコーディネーターなり、特別支援学級の担任なり、教育相談を受ける際に、こういった学びの場が他校にはありますよとご説明していかないと、なかなか伝わっていかない話でございますので、教育委員会としても周知に努めていこうと思っております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>通級指導教室をもっと活用していこうという方針なのであれば、教職員に対する理解も当然なんですけど、まず保護者がそれを理解していただかないことには進んでいかないと思います。まず、保護者に対する説明や周知が大事だと思いますので、今後、ぜひ進めてほしいなと思います。</p>

苦野一徳 委員

少し余談かもしれないんですけど、ちょっと話題提供です。概念の定義なんですけど、日本はインクルーシブ教育という言葉が出てきてから十数年たってもなかなか進まないという現状があります。既に海外ではこの概念自体が次のステージにいらしてしまっていて、インクルージョンというと、マジョリティーの中にマイノリティーを包摂するというイメージがあるので、トランスクルージョンという概念が出てきているんです。つまり、お互いに相互作用しながら共に学び合っていくイメージです。トランスクルージョンという概念が出てきていて、こういった概念が頭にあると、何か目指すべき方向が見えてくるかなという気がするので、ちょっと提起しました。

もう一つ、私の知り合いの研究者が出している概念なんですけど、ユニバーサルデザインというと、みんなに合うユニバーサルなデザインをするんだけど、次のステージにいくとレスポンスデザイン、つまりユニバーサル一つのデザインをするんじゃなくて、個々に応じてデザインを変えていくということです。これは今の通級もそうですし、校内フリースクールなんかもそうだと思うんですけど、今ある箱の中に子どもたちをいかに適合させるかじゃなくて、一人一人の子どもに合わせて、いかに箱を柔軟に変えていくかという発想は、恐らくこれから学校にとってものすごく大事な発想になると思うんです。

通級だったり校内フリースクールだったり、あるいはその他のオンラインだったり、いろんな方法で、子どもたちの安全で安心な学びの場や学習権を保障するという、そういう発想を少し頭の中に置いておくと、学校自体が変わってくるかもしれないので、そういう発想を少し浸透させられたらいいなと思って、この機会にお話をさせていただければと思いました。

遠藤洋路 教育長

後半におっしゃったレスポンス、個別最適ということに近いのかなと思ったんですけど、前半のトランスクルージョンについて、もう少し詳しく教えていただけますか。

苦野一徳 委員

言葉を変えれば少し我々の認知が変わるという感じなんですけど、インクルージョンというと、マジョリティーの側にマイノリティーを包摂する、入れ込んでいくというようなイメージがどうしてもある言葉ですよね。このトランスクルージョンというのはお互いに相互作用するので、マジョリティーとマイノリティーという区分というよりは、マジョリティーとマイノリ

ティーが相互に対等に作用し合うというか、一人一人が作用し合うという、そういうニュアンスの概念です。外国人であったり障がいのある人たちをマジョリティーの中に入れ込むという発想ではなくて、マジョリティーの側も合わせて変わっていくという、そういうニュアンスがあります。

移民とかが多い海外で出てきた概念ではあるので、日本に即座にというわけじゃないんですけど、そういった発想がないと、今後インクルーシブといったところで、結局はマジョリティーの側への同化に思われる、そういうニュアンスで捉えられるのは違うだろうということで、ちょっと提起をしたところです。

遠藤洋路 教育長

趣旨はよく分かりました。

もう一つ、学校の具体的な場面で反映させるとしたらどういう場面ですか。

苫野一徳 委員

とにかく一緒にいることは大事なんだということで、その子が苦勞したり、全然ついていけないとき、インクルーシブだから、一緒だからという感じで無理やり形だけ一緒に学ぶということをしてても全く意味がないということです。トランスクルーシブだと、子どもたち一人一人が何か困り感を抱えている子のために、じゃ、一緒にどういう学び場をつくれればいいだろうかと一緒に考え合うとか、その場にいる全員にとってよりよい場を一緒に考え合うような場合です。既定のものに入れ込んで苦しませるんじゃなくて、みんなにとってよりよい場を一緒に作り上げるという、そういうイメージになるかと思います。

遠藤洋路 教育長

分かりました。ありがとうございます。

西山忠男 委員

今、苫野委員が言われたことは非常に重要な問題で、日本の社会が抱える最大の問題だと言っても過言ではないと私は思っているんです。

生徒たちが何も意見を言わない。自分が意見を言ったら人から何と思われるか怖い。みんなと一緒にいたいという、同一化したいという願望が非常に強いわけです。目立ちたくない。これが日本の社会の一番の問題ですよ。

アメリカみたいに多様な民族がいるところでは、とにかく自分が何か言わないと理解してもらえないんです。だから、とにかく言わなきゃいけないんです。根本的に社会の仕組が違うん

遠藤洋路 教育長

です。そこを何とかしていかないと、いつまでも日本の社会がよくなる、日本の教育がよくなるというのが私の率直な感想です。

ここの委員に並んでいる人たちは日本社会の中では相当特殊な人たちということなんではないでしょうか。意見を言ったら何か言われるんじゃないかといって黙っているということは多分あまりない人たちがここに並んでいるような気がします。

そういうことは大きな問題としてありますし、そういう問題意識で今、学校改革を進めているわけですけど、一人一人が自分の人生というか、発言したり行動したりできる人を育てるという方針でやってきているんですが、今、苫野委員がおっしゃったことも、これまで熊本市の教育委員会の中では、特別支援という意味で、学校全体の改革の方針として、あまり意識はしていなかった部分です。特別支援という今までやってきたものを今後どう続けていくかというのは、率直に言うと熊本市の今の学校改革の理念の中で欠けている部分の一つだと自覚していますので、非常に大事なご指摘を苫野委員、それから西山委員からいただいたのかなというふうには思います。

今後の方針の検討の際に、ぜひそれを取り入れて考えていければというふうに思います。

小屋松徹彦 委員

この熊本市の就学支援委員会に上がってくる件数というのは例年より増えているような気がするんですが、現状はどうなんでしょうか。

野田建男 特別支援教育  
室長

かなり審議件数が増えておまして、年間1,500件程度です。一部、幼稚園も入っていますが、小学校、中学校がかなり多くそれぐらいの件数になっています。

小屋松徹彦 委員

ということは、先ほどから議論になっているように、いわゆる対症療法じゃ駄目なんだという気がします。大きな教育の課題だなと思います。

遠藤洋路 教育長

本質的なところから考えていく必要があるかなと思います。物理的に特別支援の教室を増やすとか教員を増やすということも難しくなってくる状況ですから、抜本的な方法を考えていかないといけないかなというふうに思います。

	<p>他にはよろしいですか。 他にご発言がないようであれば、採決を行います。 議第39号 熊本市就学支援委員会委員の委嘱について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。</p> <p style="text-align: center;">（異議なしの声）</p>
遠藤洋路 教育長	ご異議なしと認めます。 議第39号については原案のとおり決定いたします。
<p>・議第40号 熊本市教育の情報化検討委員会の委員の委嘱について</p>	
<p style="text-align: center;">《小田浩之 教育センター所長 提出理由説明》</p>	
遠藤洋路 教育長	<p>私から1点よろしいですか。 これは、委員の男女比なんですけど、男女の区別が書いていないので名前から見るに、男性のほうが多いのかなというふうに思います。学校教職員に関しては男女比を考えてバランスを取っているんですけど、やはりこの分野の学識経験者というのは、女性はなかなかいないものですか。</p>
小田浩之 教育センター所長	<p>今回、学識経験者の方で再任の方が3名いらっしゃいます。女性の方ということですが、学識経験者の分野では、やはり情報化に関する有識者としての立場から助言をいただける方ということをまず優先して今回選んでおりますので、そういったかたちになってしまいました。その分、今言われたように、学校であったり、他の分野から女性の目線で見ていただければということ選定をしております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。この分野でなかなか女性の適任者が世の中にいないということも一つ、今の社会の問題なのでどうしようもないけど。現実問題、なかなか適任者がいないということですかね。</p> <p>他によろしいでしょうか。 では、ご発言がなければ採決を行います。 議第40号 熊本市教育の情報化検討委員会の委員の委嘱に</p>

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>ついて、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。</p> <p>(異議なしの声)</p> <p>ご異議なしと認めます。</p> <p>議第40号については原案のとおり決定いたします。</p>
<p>日程第4 報告</p>	
<p>・報告（1）熊本市立幼稚園まなび創造プログラム（案）について</p>	
<p>《松永直樹 学校改革推進課長 報告》</p>	
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>では、本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>27ページで、ことばの教室の拡充について質問が来ていますよね。現状では希望者が多くて、全員に対して通級指導を実施できないということのようですが、回答を見ると、「希望する全ての幼児を受け入れることができるよう、市立幼稚園や小学校の空き教室を活用した設置を行っていく」と、教室が足りないような書き方になっていますが、実際は指導者が足りないんじゃないですか。どういうことなのでしょう。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>まず、指導者の面につきましては、ご指摘のとおり、今後養成を必要とする状況でございます。</p> <p>場所の問題につきましては、現在、開設が非常に限られた地域のみでございまして、これを幼稚園各園に広げること、もしくは幼稚園がない行政区におきましては、小学校の空き教室を利用することで、通うことが困難という理由で諦めていらっしゃる方に対応してまいりたいと考えております。現に通級指導教室が所在する地域から多くのお子様が行われているという現状を見ますと、潜在的なニーズもかなりあるのではないかと、問題意識もございまして、人員、施設、両面から拡充を図っていくことについて、今後取り組んでまいりたいと考えているところでございます。</p>

<p>西山忠男 委員</p>	<p>そうであれば、やっぱり指導者の育成についてもここに書くべきですね。まるで教室が足りないからできないみたいな答え方になっていますね。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>ご指摘の点につきましては、プログラム本文には盛り込んでおりますが、こちらのご意見に対するお答えの中でももう少し追記をしたいと思います。</p>
<p>出川聖尚子 委員</p>	<p>計画の中で、コア幼稚園としての機能強化というものがあります。標準指導計画や特別支援教育の推進等と書かれていたと思うんですが、特別支援教育、特別な配慮を必要とするお子さんが12%ぐらいいらっしゃるということで、このお子さんたちと幼小連携の接続の取組というものをこちらのほうで進めていこうとされていらっしゃると思います。この特別な配慮を必要としているお子さんの幼小連携接続のモデルをこの園で少し出していただけると、他の園も参考にできるのではないかなと思いました。</p> <p>特別支援教育と幼小連携と別々に分かれている施策を一つに結びつけるといいのではないかと思いました。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>今ご指摘の点につきまして、これまでの議論を進めていく中で、ご意見としても出たところがございます。その取組の一端としまして、プログラムにもある教育福祉連携コーディネーターの派遣や、本年4月から幼小連携支援員としまして、小学校にご勤務の経験のある再任用の先生に、幼稚園各園で業務を行っていただいております。</p> <p>既に、今ご指摘のあったような点につきまして、幼小連携支援員が保護者の方にアドバイスをされるという実績も上がってきているところがございます。そういった実践を重ねながら、今年度中に、今申し上げたようなコーディネーターの業務の整理等も行っていく予定としております。その中で幼稚園と関係機関と議論を進めまして、保護者の方に見えやすいかたちでご提示できるよう取組を進めてまいりたいと考えております。</p>
<p>出川聖尚子 委員</p>	<p>ありがとうございました。</p> <p>今お話しいただいたコーディネーターの方は、保育所とかそういうところにも行かれるということになるのでしょうか。</p>

<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>大変申し訳ございません。業務内容の整理等につきましてはこれからの課題でございますので、今年度中に整理をしたいと思っております。</p> <p>現状の課題認識としましては、保育所もそうですが、特別な支援を要するお子様については、福祉施設とのつながりはあるものの、そういった方々が教育機関、具体的に言えば幼稚園、小学校での在り方について相談をするときに、どこにどうつながっていいか分からないというようなご意見もいただいているところでございます。ですので、特に福祉のこの分野ということで限定しては考えておりませんが、主に特別支援教育を想定はしておりますものの、こういったニーズがあるかというのはこれからきちんと整理をしてまいりたいと考えております。</p>
<p>出川聖尚子 委員</p>	<p>ありがとうございます。</p> <p>例えばはっきりと福祉施設を利用されているお子様でしたらそことの連携が可能なんですけど、ちょっと心配だなと思ってお子さんに関しては、園はどことどのように接続をすればいいのかという事例もあると思いました。</p> <p>例えば言葉が少しくまなく話せないということでしたら、小学校に入学するときに支えられながらできるのかなと思うんですけど、そうではないグレーのような方たちも、モデルケースみたいなものがあると、小学校に接続するのが進めやすいのかなと思っております。</p> <p>そういうモデルみたいなものを提示して、ここに通っていない方にも分かるようになるといいのかなと思いました。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>今ご指摘の点もこれからの検討に含めまして、議論を重ねたいと思っております。</p> <p>私立幼稚園協会等からも同じような問題提起をいただいております。その中では、これまでも様々な相談窓口はあるんですけど、グレーゾーンのお子様、もしくはちょっと懸念をしている方にどうつなげていくか難しい部分があるというお声をいただいております。</p> <p>協会からの具体的な提案としましては、今年度配置しました幼小連携支援員の方で、例えば小学校で特別支援教育の従事経験がある、指導力がある先生がいらっしゃるのであれば、私立に通う子も含めて相談をさせてもらえないか、そういったご意見もいただいているところでございます。</p>

	<p>また、例えば窓口として、通級指導教室の拡充の際に、ことばの教室やあゆみの教室の先生方がいろいろと聞いていくこともあろうかと想定をしておりますので、そういった様々な面において対応できるような体制ができるよう進めてまいりたいと考えております。</p>
出川聖尚子 委員	ありがとうございました。
遠藤洋路 教育長	今の点については、特別な支援を要する子どもの対応について幼稚園から小学校への引継ぎが十分にできていないというようなご意見を、以前私も確かにいただきましたので、それについてはまた検討していくようにしましょう。
小屋松徹彦 委員	<p>まなびプログラムのほうを見させていただいたんですけど、いわゆる幼稚園の役割というか存在意義というんですか、これを見ますと、「私立幼稚園の園児数が減少する一方で、比較的長時間の教育・保育を行う保育所や認定こども園に通う児童が増加している」とあります。つまり、そういう幼稚園に対する需要がどんどん減ってきていると思うんです。</p> <p>そんな中での幼稚園の存在意義って何だろうということを考えたときに、例えばことばの教室とかあゆみの教室、あれは非常にいいなと思うので、そういったものをどんどん充実させていかないといけないと思うんですけど、小学校に上がるまでの高度な教育を行うという、ここでの幼稚園の役割はどうなんだろうなど、私、正直疑問に思っていて、むしろ幼稚園の在り方について、少し観点を改めて考えたほうがいいんじゃないかなという気がしていたんですが。</p>
遠藤洋路 教育長	小屋松委員、今の件なんですけど、もう少し詳しく教えていただけますか。観点を改めてというのはどんな感じのことをイメージされているのでしょうか。
小屋松徹彦 委員	例えば、今はもう認定こども園というのが増えてきていて、そこには幼稚園として来ている子と保育園として来ている子とありますね。実態を見ていると、多分幼稚園として来ている子は途中で帰るんです。その差はほとんど見た目には分らず、ちょっと言い方は乱暴ですけど、園にいる時間が長いか短いぐらいの差しかないんじゃないかなと思ってしまいうんで

遠藤洋路 教育長

す。幼稚園としての機能が認定こども園でどう差別化できているのか。もし何か情報があれば、幼稚園の教育機関としての機能は大事なんだなというふうに考えられるかと思うんです。

ただ私が考えるのは、やはり今後の幼稚園の在り方として、私立の幼稚園も含めてですけど、支援を要する子どもたち、あるいは小学校につなげる幼小連携というか、そういう役割というのがやっぱり大きく占めてくるかなと思いますから、ご提案をさせていただきました。

教育の質というところですね。幼稚園というのはただ保育園の時間が短くなっただけではなくて、教育としてどんなシステムがあるのかというお話かと思います。

松永直樹 学校改革推進課長

今のご質問の件に直接的なお答えになるかどうかは分かりませんが、プログラムの20ページに標準指導計画の作成というものを記載しております。これは私立の幼稚園や保育園も利用できるものをつくるということでございますが、私立幼稚園、また保育園からの評価としては、市立の幼稚園というのは教育内容として非常に充実した取組を進めているということがご認識としてあります。

実際にご見学もいただいているとお聞きしておりますが、そういった意味で、今、幼稚園各園が実践しているものを、いろんな形で取り入れやすいようにしてほしいというご要望が上がっております。

そういう意味でいきますと、市立幼稚園の役割として、先ほどコア幼稚園というような表現もございましたが、幼稚園、保育園、そういう幼児教育施設で行われるときの参考となるものの提示ということが、一つ存在意義としてあると思っております。

また、市立の幼稚園ですので、幼小連携というものが非常に大事かと思っております。この点についても、私立の幼稚園、保育園からご要望として上がっております。市立の幼稚園がそこに率先して取組を進める。6園しかございませんので、6園のモデル的な取組を進めるということになるんだろうと思うんですけど、その中で実践例をどんどんオープンに見ていただき、熊本市全体として幼児教育を高めていくということ、これが我々も目指しておるところでございますし、保育園や私立の幼稚園からもご要望としていただいているところですので、

遠藤洋路 教育長

この視点は大事にして取組を進めたいというように考えております。

ありがとうございます。

幼稚園教育の意義というのは、苫野委員が詳しいんじゃないですかね。

苫野一徳 委員

私も似たような点で少しご質問させていただこうと思っていたので、それも併せてお話をさせていただきます。

幼小連携支援員が小学校勤務経験のある退職教員ということなんですけど、こちらは幼稚園勤務経験のある退職教員を配置する予定はあるかをお聞きしたいなと思っているんです。

既に幼稚園教育の意義ということと関係して、この会議でもしばしばお話しさせていただいているとおり、本市の現状はそこまで詳しくないのですが、やはり幼保小連携というときに、どうしても小学校に幼保が合わせるといった感じがまだまだ全国的な傾向かと思うんです。

やはり幼稚園教育の意義というのは、5つありますけど、1つはやはり「遊び光るから学び光れよ」という、この教育の基本中の基本のところですよ。遊び光るところに探求することであったり粘り強くやり遂げることだったり仲間との関係性を自分たちで築くとか、特に幼稚園も年長さんとかになっていくと、すごく頼もしいお兄さん、お姉さんになるんだけど、残念ながら、まだまだ多くの小学校だと、1年生が入ったときに何もできない子ども扱われるようなことがしばしば起こってしまうわけです。

そういうときに、幼稚園が何を大事にして、どんなふう子どもたちの自主性を育て、子どもたちが自分の場を主体的に遊び光ったりとか、関係づくりだとか、こういうことをどれほど大事にしているかというところ。先生同士も子どもたちの姿がどうで、その成長を共に喜ぶという、そういう見取りの仕方というのが伝統的にあると思うんです。

小学校の場合は評価がどうしてもある。評価の枠が先にあって、これに合わせて子どもを見て取っていくという視点が多かれ少なかれどうしても入ってきてしまう。

そういう意味では、幼児教育にこそ、ある種教育の本質というか、一番の基本があるので、幼稚園が何を大事にしているかということが小学校に伝わるような連携の仕方というものがある

<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>ると、より充実して、より本質的になっていくんじゃないかなと感じました。</p>
	<p>アイデアとしましては、ご指摘のものを含め考えたところではございますが、物理的な問題として、市立幼稚園の退職教員は出なかったということもございまして、具体的に検討は進まなかったところでございます。</p> <p>ただ、非常に重要な部分だというふうに考えておりまして、その代案ではございませんが、当面の施策としては、本文26ページに職員研修の充実というものを掲げております。この中で、幼小問わず、公私問わず、共に学ぶ場をつくっていくということも盛り込んで取組を進めたいというふうに考えているところでございます。</p>
<p>小屋松徹彦 委員</p>	<p>誤解のないように、別に幼稚園を否定しているわけではありません。ただ市立幼稚園としての役割、そこは私立の幼稚園もあるので、そのモデルをつくっていくような、そういう先駆的な取組をやる役割というのは市立の幼稚園にあるのかなというふうに思います。</p>
<p>福田衣都子 指導課長</p>	<p>少し松永課長がお話しされたところに補足をさせていただきたいと思います。</p> <p>苫野委員がおっしゃった、また小屋松委員もおっしゃったところがとても大事だと指導課でも考えておりまして、幼小中連携について、指導課で担当させていただいております。特に、先ほど苫野委員がおっしゃっていたように、幼稚園が小学校に合わせるというようなかたちが多かったのかなと思うんですが、小学校、中学校が幼稚園の教育に学ぶということが非常に大事だと考えております。</p> <p>例えば昨年でございますと、K u m a m o t o E d u c a t i o n W e e kの中で幼稚園の実践を発表していただきまして、それを学ぶ機会を作ったりとか、また、一斉授業研究会とあって、小学校の教科等研究会があるんですが、その中で幼稚園の取組をご紹介いただき、小学校の教員がそれを学びに行くというようなことを重ねております。</p> <p>今後も、幼稚園の教育に小学校が、それから中学校が学んでいく、その接続を大事にしていきたいと考えております。</p>

遠藤洋路 教育長	<p>今、出ていますように、幼稚園、幼児教育というのは、知識とか技術的なものを身につけるといよりは、人間性といひましようか、非認知能力を養っていくところに重点が置かれているのかと思いますが、現実問題、保護者の要望としては知識、技術のほうを身につけさせたいということもあって、それに応えざるを得ないという、特に私立の幼稚園に関してはそういう現実もあるということです。</p> <p>公立幼稚園はその中でどういう役割かといえば、本来の幼児教育の目指すものを大事にすることで、それでも小学校との接続はうまくいくんだよということを示すという、そういうモデルをつくる必要があると思いますから、それができるように、今、やっていると思っています。</p>
苫野一徳 委員	<p>先ほどの出川委員のご質問ともちょっと関連するかとは思いますが、教育福祉連携コーディネーターは、基本的に先生がなさるという理解でよろしいでしょうか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>現時点での想定では、教員を考えているところでございます。</p>
苫野一徳 委員	<p>ありがとうございます。</p> <p>もちろん学校の先生がその主体であられるのが大事だと思うんですけど、私も先ほど出川委員がおっしゃったような、いわゆるグレーゾーンとか、保護者の方がとても心配されているケースによく立ち会うんです。相談いただくんですけど、どこにどう伝えていいか、私も分からないんですよ。本当にエアポケットになっているなという感じがあって、知り合いの発達障害などを専門にしている人のところにたまにつないだりするんですけど、やっぱりそこで悩まれている方って本当に多いと思うんです。</p> <p>学校の先生に変に相談すると、先ほどのインクルーシブともちょっと関係するんですけど、今の仕組の中でどうするのが一番いいかという発想になりがちだと思うんです。</p> <p>つまり、現実的にはしっかりと理解していないことにはアドバイスもできないので難しいんですけど、現実がこうだからということだけじゃなくて、どうお子さんと関わるといいとか、あるいは心配しなくていいよとか、親身になって支えてくださるとか、安心したいというのがすごくあると思うんです。そ教</p>

<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>育の専門家とは別目線での専門家の存在というのが、こういったケースに関してはものすごく大事だなというのを実感してまして、そのあたり何か案はないでしょうか。</p> <p>まず、苫野委員がお話をされました、今の既存の枠組みにとらわれずという点につきましては、そういった視点を今後議論の中では大事にして進めてまいりたいというふうに思います。</p> <p>表現として適切かは別にして、グリーゾーンといたしますか、判断に悩むケースにどう対応していくかというのは、確かに今想定をしております教育福祉連携コーディネーターのみで対応できるわけではないと思っています。</p> <p>例えば今、専門の研修を受けました発達支援コーディネーターもおりますし、通級指導教室の教員もおります。また、本年度からスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーについても、幼稚園も利用ができるような体制を構築できましたことから、網から漏れないといたしますか、できるだけエアポケットに落ちないような支援の在り方、これも視点の一つとして検討を進めてまいりたいというふうに考えます。</p>
<p>苫野一徳 委員</p>	<p>ありがとうございます。やはり多種多様な専門性が連携するということがすごく大事だなと思いましたので、そういう人材がつながり合って、熊本市の支援に取り組んだらいいなというふうに感じました。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>この点は、特別支援教育室ではどんなことを今やっているのでしょうか。</p>
<p>野田建男 特別支援教育室長</p>	<p>熊本市の場合は、特別支援連携協議会という専門家の方とか福祉の方とか、そういった方々を委員に招いていろいろご意見をいただいたり、その他に専門家委員のチームがありまして、そこでご要望があった園や学校に行っていただいて、子どもの見取りをする巡回相談員を派遣しております。</p> <p>そういったところで、園に直接指導したり、保護者の方にお話をしたりという仕組みをつくって、できる限り地域の中に入って行って網を張っていくという取組は進めております。絶対大丈夫というわけではありませんけど、できる限りそういった支援が漏れないように、就学前のお子さんを見取れるように工夫はしているところでございます。</p>

遠藤洋路 教育長

分かりました。  
他によろしいですか。  
では、他にないようであれば、本件は、以上といたします。

- ・報告(3)「第2期 学校改革!教職員の時間創造プログラム」における令和3年度実績報告及び今後の取組について

《松永直樹 学校改革推進課長 報告》

遠藤洋路 教育長

では、本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

西山忠男 委員

6ページで、表の見方の説明があるんですが、「上段:直近の【平日5日間】を振り返って【平日1日あたり】にならした業務時間」と書いてあって、例えば一番上の小学校の平成29年を見ると、「0:44」という表記になっていますが、これはどういう意味ですか。「0:44」とか「0:40」とか。

松永直樹 学校改革推進課長

今のご指摘の部分については、44分、40分といった感じで、時間でございます。

西山忠男 委員

そうしたら、「1:17」は1時間17分という意味ですか。

松永直樹 学校改革推進課長

そのとおりでございます。

澤栄美 委員

今のアンケートのところになるんですけど、私が現場にいたときからこのアンケートはやっていて、非常に答えづらかったです。というのは、私は養護教諭でしたので、自分がやっていないことも多々あって、逆に養護教諭がやっていることがアンケートにないというような内容だったので、教諭中心の考え方が成り立っているところもあるのかなと感じるんです。

18ページが一番下のところに、「養護教諭関係でいえば、業務がそれだけよくなったというのは、教諭の目から見たところであり」というような意見が書いてあったと思うんですけど、

やはり学校にはいろんな職種の間がいますので、教諭がどうかという目線だけではちょっと語れないところもあります。例えば9ページで保健室業務が107、事務室業務122とかもありますけど、これは絶対数として、養護教諭や事務職員は少ないので、どうしてもこういうふうになんか少なくなってきます。

そもそもアンケートの内容自体はやはり職種ごとに検討されてもいいのかなというのを思いました。

以前、2018年ですのでちょっと古くなるんですが、養護教諭会として調査をしました。養護教諭の場合は定期健康診断がありますので、何人かの先生方の勤務時間を調査したところ、平均が6月で106時間、7月で82時間というふうに、その期間中の勤務時間が断トツに上がってくるわけです。

しかも、他に19ページの2つ目のところの意見にもありますが、持ち帰りの仕事というのも一つある。ちょっと話が付け足しになって分かりにくくなっているかと思いますが、養護教諭はほぼ女性、熊本市の場合は全員女性ですけど、やはり子どもを抱えていたりすると幼稚園のお迎えとか、そういったものも出てきて、個人情報的なものは持ち帰らないにしても、持ち帰って仕事をしている割合もやはり多いし、それは養護教諭だけに限らず他の職種も同じです。そのようなことについても考えていけたらいいのかなというふうに思いました。

ちょっと話が2つ重なって分かりにくかったかもしれませんが、1つは職種ごとの考え方というのも必要じゃないかということと、それから持ち帰りの仕事をしている職員も結構いるのではないかという、その2点についてです。

松永直樹 学校改革推進課長

第2期プログラムをつくる際には、その点は重視したところでございます。これはもともと「教員の」としておいたプログラム名を「教職員」としたのは、大多数の教員のみならず少数職種や校種も含めてしっかりと取り組んでいくというようなことを意味合いとして出したものでございます。

ですので、昨年プロジェクトに少数職種の方にもご参加いただけるようにしました。その中でこういった課題があるのかも、プロジェクト会議を含めて議論したところです。

大部分は大多数の職種、校種と同じような課題があるということが見えました。ただ一方で、それぞれの職種ごと、校種ごと特有の課題もあるということも十分見えましたことから、この点については、今年度、先ほど申し上げた分科会の場を通し

て、人数はある程度絞って深掘りの議論ができるように、課題整理ができるようにしてまいりたいというふうに考えております。

そのためのツールとして、昨年度のアンケートはちょっとやり方を変えまして、分析ツールをちょっと変えまして、職種ごとに分析しやすいように整理をいたしました。

一方で、あまりアンケート項目数が多くなると、それ自身が教職員の負担になるのではないかというような問題意識もございまして、項目数をかなり絞ったことがございます。そのせいで、今ご指摘の養護教諭の部分や、例えば事務職員の部分について十分に勤務実態が取れていない部分もございましたので、そういったものについては、今申し上げた分科会での議論を通して、今後議論を重ねたいというふうに思います。

また、持ち帰りの仕事の問題ですけど、これはある意味出勤打刻の問題でもございます。ハード面を含めて、様々な課題もございますし、どこまでを職務とみなすかというような課題、これも昨年度プロジェクト会議を進めていくうえで学校現場からの課題としてお示しされたところがあります。自主的な自己研さんも勤務時間に入れられてしまうと自己研さんしづらくなるとか、そういったことについてもう少し整理が必要ではないかとか、そういったご意見ともちょっと重なる部分が今のご指摘にあるかと思っておりますので、その点も今年度議論する予定としております。またまとまり次第ご報告をさせていただきたいと考えております。

澤栄美 委員

報告の最後のところに職種や校種ごとの課題を共有するための工夫があったので、これは考えていただいているなと思えました。

業績評価にしても、最初の頃は養護教諭は書きにくかったから職種ごとになってきたりとか、やはり意見を言うべきことは言うのが大切じゃないのかなというふうに思ったところです。

それともう一つ、教員側も時間を意識することが大事だと思いました。ただだらしとしてしまうものと思うんですけど、この時間までにやらなければいけないと思ってすると、教職員も自分たちでここまでで終わるんだという段取りをつけて仕事をするというのは、やはり大事かなと思います。

例えば保護者の急な相談が入ったりすると、なかなかできないんですけど、ただ一人一人の意識というのは改革にもやっぱ

	<p>り必要なと思いながら聞きました。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>確認なんですけど、6ページ、7ページのアンケートというのは、上段は「主幹教諭・教諭・講師のみ」となっていて、下段は特にそう書いていないんですけど、上段は教職、教諭と講師だけで、下段は全員聞いていると、そういうことなんですか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>上下段ともに主幹教諭・教諭・講師のみであったかと思いますが、少し確認をさせてください。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>そうすると、養護教諭とか事務職員というのはこのアンケートには答えていないということになるわけですか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>アンケート自体にはお答えをいただいて、データとしては持っていますが、それをアンケート結果に反映していない部分があるということでございます。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>アンケートは取っているんだけど、これに載っているのはこの3職種の合計だけですよという、そういう意味なんですかね。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>ご指摘のとおりでございます。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>そうすると確かに全員共通の、これは質問項目なんですかね。それとも養護教諭は養護教諭向けの問いがあるんですか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>今回、職種別の設問を設けるべきではないかという議論はしたところでございますが、そうすると設問数が多くなってしまうという課題もございましたので、この6ページ、7ページについては職種ごとの特別な設問というのは設けておりません。また、昨年度初めて実施しました全職員向けのアンケートについても同様でございます。</p> <p>アンケートの在り方については、まず、昨年度実施して、それを分析した上で、どのようなやり方が望ましいかというのは今年度また整理をしたいと考えております。それはプロジェクト会議でもご意見としてあったところでございますので、この点についてはさらに精査を進めてまいりたいと考えておりま</p>

	<p>す。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>職種別になると設問数が多くなるという理屈がよく分からないんですけど、むしろ職種別にすれば自分の職種だけ答えたらいいので、設問数が少なくなるんじゃないかと思いますが。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>システム上、この職種だったらこの問いに飛ばすということをやれば、確かに職種ごとにそう増やさず、聞きたいことが聞けるというのはあるかと思いますが、今後、実施の際にはその点も検討してまいりたいと思います。</p>
澤栄美 委員	<p>実は私もさっきそこがちょっと引っかかっていたんですけど、ただ、さっき申し上げたように、今後の課題のところで、職種や校種ごとの課題等を正確に把握するということがありますので、アンケート内容についてもそこで検討していただきたいと思います。何のためにアンケートに答えているのかなという懷疑がとてもあったんです。</p> <p>例えば私で言うと、兼職発令というのを受けて保健の授業をしていましたので、成績のこととかそういうところも書けるんですけど、兼職発令を受けている人たちが熊本市は割と多いほうで12%ぐらい、それでも88%の人たちは授業していないわけですね。それで成績処理について回答しろと言われても困るよねというようなところがとてもあったし、どこかのページでは健康診断が生徒指導に入っていて、何で健康診断が生徒指導なのかという部分もありますので、今後アンケートをまた新しくつくられるときには、そういったことを職種別にしっかり検討していただければと思います。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>ご指摘ありがとうございます。今の点については留意をして取組を進めてまいりたいと思います。</p> <p>先ほど教育長からご質問いただいた点について、補足修正させていただきます。</p> <p>6ページ、7ページの表の見方で、上段のほうは主幹教諭・教諭・講師のみでございましたが、下の負担感については全職員を入れておりました。先ほどは誤認していましたが、この在り方についてもそういうことでよかったのかという課題意識はあったものの、29年度以降、そういった公表の仕方をおったことから、統計的な整合性というものもございましたの</p>

遠藤洋路 教育長

で見直しはしなかったところでございます。昨年度末に新しいアンケートを実施するに当たりまして、この点も課題になったところございまして、アンケート自体の在り方についても精査を進めてまいりたいというふうに考えております。

確かにパーセントでしたら割合なので、母集団が変わるとパーセントも変わってしまうのかもしれませんが、上段で職種を絞れるのであれば、下段も職種を絞ったデータにして取るということは可能かなというふうには思いますので、検討してみてください。

小屋松徹彦 委員

1つちょっと残念だなと思ったのは、13ページです。13ページ目の円グラフの上のほうで、「時間創造プログラムについてどのくらい知っていますか」というので、「あるのは知っているが読んだことはない」と「知らない」が合わせると60%近くなるんですね。教員の時間創造プログラムから教職員の時間創造プログラムとなってもう4年目というのに、6割近くの人知らないとか読んだことがないというのは、やはり残念至極ですね。どのような認識でいらっしゃるのかなというのをちょっと疑問に思いました。

それから、数字的なものでは確かに改善点は見られるんですけど、なるべく短い時間で効率を上げるという労働生産性というのを非常に重要視するわけですけど、学校の中には労働生産性という概念というのはなかなか取り入れにくいのかなというのをちょっと感想として思いました。

もう一点は、18ページ、19ページに触れてありましたけど、授業時数の削減、これに取り組むことで多少時間創造につながるのかなというふうに思いましたので、この授業時数の削減についてはどのようにお考えなのか、方向性を教えていただければと思います。

福田衣都子 指導課長

授業時数の削減についてですが、標準の時数プラスアルファの予備の時数が以前はかなり多く取ってあったという現状がありました。

もっと少なくしていくという方向から、来年度は予備時数ゼロに向けて取組を進めていこうというところで考えております。学校にもそのような周知をしているところです。

文科省においても、標準時数はもちろん大事なんですけど、学

小屋松徹彦 委員

習内容をしっかりと終わることということを大事にされていて、その点が文科省も変わってきておりますので、併せて学校には繰り返し周知をしていきたいと思っております。

文科省がそういうふうな考え方に変わって、そういう内容に授業も変わっていくという中で、時数ではなくて内容が変わっていくわけじゃないですか。授業時数の削減というのは、本当にある程度今後考えていかないといけないのかなと思います。

西山忠男 委員

目標達成度の2ページの達成状況及び3ページ、同じグラフですけど、これらを拝見すると、なかなかゼロにするのは難しいなという感じです。もうほぼ横ばいになってきていますよね。だから、今後どうやったら減らせるのか、今までの取組でももうここまでしかいかないという状況になっているんじゃないかという気がするわけです。

ですから、今後目標を達するには何をすべきかということなんですけど、それについていかがお考えでしょうか。

松永直樹 学校改革推進  
課長

ご意見の中で、人の配置の問題というのは多く要望として上がっておりました。あと、もう一つの大きな要望として上がっておりましたのが部活動の改革でございます。国も今月、新たな方針の素案を出して、来年度から3か年間で重点的に取り組むようなことを考えております。

我々も中学校教員において非常に大きなウエイトを占めております部活動の在り方については、しっかりと議論をしたいと思っております。そのためには学校現場もしくは関係機関と十分支援をするということで、取り組んでまいりたいと考えております。

一方、小学校現場においては、1人の担任の先生が全ての授業を見ていくということで、例えば休みづらさであったり、そういったものがございます。教科担任制を広げてほしいという要望もございますし、現在、その点についてはかなり取り組んでいるところもございます。また、先進的な取組を行っていらっしゃる学校では、午前中に5時間授業をして、1時間を40分で5時間授業をやって、午後からしっかり授業準備に取り組めるような取組をされていらっしゃるような学校もございます。

そういった様々な取組を学校現場にもご紹介しながら、各学

出川聖尚子 委員

校において、それぞれの地域において、こういったものが適切かというのを見ていただき、取組を進めていただくことができたというふうに思っているところでございます。

教員採用試験を受けにくる学生さんの面接をするときに、この時間創造プログラムに関心があるのだなと感じるので、これが進んでいくと、教職に就きたいとか熊本市で就職したいとか思われる方が増えるのではないかというふうに期待していますので、どんどん進んでいくといいなと思っています。

ただ、先ほど西山委員も言われていましたように、横ばいの状況になっているものもあるので、工夫をする必要があると思いました。

それと、7ページにあります20番の休憩が非常に少ないので、これを必ず取れるようにする、就業時間内に確保するような取組はできるようにしたほうがいいのではないかなと思います。ずっと授業をして休憩もなく、学校給食もあって、帰るまでずっとというのは負担が大きいのではないかなと思います。早く帰る、退勤というのも大事なんですけど、その中で少しリフレッシュできるような時間をつくる取組も同時にされるのがいいのではないかなと感じました。

松永直樹 学校改革推進  
課長

まず、1点目の職員採用の部分でございますが、学生が働き方改革の進展状況に強い関心を持っているんだというのは私たちも感じております。実際、説明会の場に当課職員も参加させていただきましたが、一番の関心事でございましたので、そこにしっかりアピールできる取組を進めてまいりたいと考えております。

あと、現時点の取組状況として横ばいになってしまっているということは確かにございます。休校期間の問題はございますが、それを除いても、やはり第1期プログラムにおいて様々な改革をかなりの金額を投じてやったというところで成果があって、第2期目でどこまでやれるか、何をやるのかというような部分が課題としてあるかと思いますが、最大限取組を進めたいと思います。

また、小さな取組の一つ一つの積み重ねも大事だと思っています。取組が進んでいる校長先生からもそのようなアドバイスをいただいておりますので、そういったものも併せて提示をして進めていけたらというふうに考えております。

	<p>それから、休憩時間の問題についてもプロジェクト会議でご意見として出ております。特に特別支援学校の先生がなかなか休みが取れないということで、ぜひ学校種別の課題としても見てほしいというご意見もいただいておりますので、そういった点についても今後議論をする予定としております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>2か月休校があった令和2年度と1年間通して授業があった令和3年度で同じ横ばいになっているということは、実質的には減っているという部分はあるんでしょうけど。私は今後もっと減っていくんじゃないかなと思います。</p>
澤栄美 委員	<p>現場にいらっしゃった方は分かれると思うんですけど、休憩時間って本当になくて、労基法で8時間で45分は取れるようになっているわけですよ。ただ、それこそさっき言われていた給食の時間とかも、結局それは給食指導となっているわけです。私たち養護教諭も4時間目が終わっても、保健室に来る児童生徒がいるので、休憩を取らなきゃいけない時間は、業間の時間に設定してあっても全然休憩にはならないし、給食すら食べられないこともあったんです。</p> <p>だから、例えば給食の指導とか、あるいは何かのときとか、やはり代わりにそれをしてくれる人員がいないと、学校という性質上、子どもたちは、先生たちが休憩時間だからこの時間は僕たちは何も言いませんとかというのができないので、そういった一工夫だったりが必要かなというのは、今聞いていて思いました。実現するためには、何か一工夫が要るなと思いました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>学校の仕組上、確かに休憩時間は、子どもが一時停止しているわけじゃないので、誰かが見ないといけないですよ。休憩時間を増やす方策としては、もう人を増やすということしかないというふうに思いますので、どういう人をどういうふうに増やすかということは、検討していく必要があると思います。</p>
出川聖尚子 委員	<p>例えば工夫の一つとして、2クラスを一緒に見る時間をつくるとか、ちょっと休憩の時間をずらすとか、今あるものでできる工夫をされるといいかなと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>1クラス40人とかいう学校でなくて、例えば1クラス15人とか20人とか、そういう学校であれば、給食とかを2クラ</p>

スを合わせて誰か1人が見て、もう一人は休むというのを交代でやると、そういう工夫は確かに可能かもしれませんが、もちろん根本的には人を増やす必要があるかと思いますが、できる工夫はやはりしていただきたいと思います。

他によろしいですか。

では、他になれば、本件は以上といたします。

・報告（4）「令和3年度生徒指導状況報告」の結果報告について

《須佐美徹 総合支援課長 報告》

遠藤洋路 教育長

では、本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

澤栄美 委員

ユア・フレンドについて、令和4年度に家庭訪問できなくなったのはなぜかというのが一つ目の質問で、それからもう一つ、この2ページ目には名前としては出てきていないんですけど、心のサポート相談員が配置されていますよね。心のサポート相談員は、特に資格を持つ方ではありませんよね。だけど、一生懸命研修を受けられたりする方もいらっしゃると思うんです。ある学校で心のサポート相談員の人から「学校に来なくていいよ」と、「教室に行かなくていいよ」と言われて、非常に不登校や別室登校が増えたんですよと聞いたことがありました。心のサポート相談員とは、基本的には、私の認識では、ちょっと居場所がない子どもたちとお話をして心を少し穏やかにするとか、そういった役割だと思うんです。

だから、具体的なその子の状況が分からないで、どこかで研修を受けた知識だけで、「教室に行かなくていいよ」と言えるのかと思います。心のサポート相談員への指導というのにも必要かなと思ったので、どうなっているのかなという2点について、聞かせてください。

須佐美徹 総合支援課長

心のサポート相談員の方の研修会も行っておりますので、そのような機会を通しまして、お話ししていきたいと思います。

今後、今おっしゃったようなことが起きないようにしていきたいと思います。

澤栄美 委員	もう1点、ユア・フレンドについてはどうでしょうか。
須佐美徹 総合支援課長	ユア・フレンドは、コロナで感染拡大防止のために、家庭訪問はせずに学校だけということにしております。
澤栄美 委員	スクールカウンセラーの家庭訪問は何年か前からできるようになりましたが、それもなしということなんでしょうか。
須佐美徹 総合支援課長	スクールソーシャルワーカーは、今家庭にはもちろん行っておられますけど、スクールカウンセラーの家庭訪問もコロナの状況を見ながらというところです。中にはオンラインで行う場合もあります。
澤栄美 委員	分かりました。私が現場にいた頃に、スクールカウンセラーも家庭訪問していいということで一緒に行ったことがあったのでお聞きしました。
須佐美徹 総合支援課長	ユア・フレンドに関しましては、大学とお話をしながら進めておりますので、コロナの心配がなくなれば、また家庭訪問できるかと思います。
澤栄美 委員	ありがとうございます。
遠藤洋路 教育長	確かに大学に来ない状況で家庭訪問をするというのは変な話かもしれませんね。
出川聖尚子 委員	2点教えてください。 1点目が、1ページ目の暴力行為が50件ほど増えていますけど、暴力行為がこのような増えている理由について、どうお考えなのか教えてください。 もう一点が、3ページ目に不登校の要因別と書いてあるんですが、その中で「生活リズムの乱れ・遊び・非行」という理由が⑫番に書いてあります。これも多いのかなと思いますけど、このお子様に対してはどういう支援を行っていらっしゃるのか教えてください。

須佐美徹 総合支援課長

まず、1点目の暴力行為の状況についてなんですけど、これは中学校ではちょっと下がってしまっていて、小学校が増えているところですよ。

その理由については、はっきりと明確にはお示しできないんですけど、なぜそういう状況が多発しているのかということで、いろんな環境の影響もあったり、同じ子どもさんが何回もやるということもあると思います。小学校で少し生活の面で落ち着きがないというご報告をいただいているところもありましたので、ひょっとしたらコロナも含めたいろんな影響があるのかもしれないんですけど、その辺ははっきりとはお答えできないところですよ。

続きまして、2点目の要因別のところなんですけど、これは経年比較のところ、「無気力・不安」というところが一番大きくは変わっているところですよ。これは主要因を一つ選んで、その後、副要因を2つ選んでいただいています。この中で生活のリズムの乱れというのが増えていきますけど、やはり登校しない状況で昼夜逆転になったり、ゲームをたくさん夜遅くまでやって起きれないという子どもさんたちが、欠席数が多い中ではそういう、特に長期化してくるとその辺のリズムが崩れてきます。不登校自体も児童生徒自体の数が増えていますので、やはりそこに影響しているというふうに考えております。

フレンドリーオンラインというオンラインをやっている中で子どもたちからコメントをいただきます。その中で、学校には登校していませんが、オンラインに参加することで生活のリズムが整えられます、ありがとうございますというような児童生徒のコメントもありましたので、やはり朝から何らかのアクションをちゃんとやる、学習を始めます、終わりますというような取組があると、やはりいいリズムが整っていくのかなと思いました。

出川聖尚子 委員

1点目の暴力行為のところは、個別で何回もするお子さんがいらっしゃるといってお聞きして、そういうことで数が増えるということもあるのかなと思うんですが、そうならないようにすることが大事だと思いますので、個別の案件から、何か原因があればそこを対策していく必要があるのかなと思いました。

あと、先ほど不登校の要因別のところで、生活のリズムの件をお聞きしたんですけど、遊びとか非行とか、こういうお子さんはなかなか学校とも、あるいはご家庭とも接触できないよう

須佐美徹 総合支援課長

な状況で、だんだん高校とか中学校にも行かなくなるというところを心配しているんですけど、社会との関係性がなくなってしまっていくというのが心配なんです。そういうところには何かアプローチがあるのかどうかお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

非行傾向といいますか、そのような子どもたちに対しまして、学校に来られない状況で夜間、深夜とかに徘徊するというような状況が見られるということは確かにあります。

総合支援課としましては、さっき言ったようなスクールサポーターや、警察におられる方とも連携したり、スクールソーシャルワーカーの方に家庭に行ってもらって環境を調整していただいたり、また、児童相談所を含めた関係機関との連携で対応したりということで、なるべく関わりを持つように子どもたちには働きかけをしているところです。即効性がなかなかあるものではありませんけど、粘り強く関わっていきいたいと思います。

出川聖尚子 委員

ありがとうございました。

遠藤洋路 教育長

生活リズムの乱れと遊びと非行というのが1つの項目になっているんですけど、生活リズムの乱れと非行は大分違うような気がしますよね。文科省の分類がこうなっているということでこの分類なんだろうけど、少し適切な項目にして後で足すとか、今後は何か工夫をしていくといいかもしれないですね。

イメージですけど、どちらかという、あんまり生活リズムの乱れの中で、非行という割合は多くないように思います。

それから、小学校の暴力行為が増えているというのは、増えていること自体は熊本市だけじゃなくて全国的な傾向だったと思いますけど、ここに関して見ると、令和2年度が57件で令和3年度が108件でほぼ倍になっているので、これは実態が急に倍になったというよりは、何か数え方というか把握の仕方の違いのようにも思えます。実際に倍、こういう行為が発生したという可能性ももちろん否定はしませんが、全部の小学校で急に暴力行為が倍になるということはあまり考えられない。少し特定の要因があるようなものですよね。どの学校でどのぐらい増えているのかということも含めて精査してみる必要があるなと思います。

<p>西山忠男 委員</p>	<p>先ほどちょっと触れられた「無気力・不安」なんですけど、これは小学校でも中学校でも断トツ多いわけです。ただおっしゃったように、この「無気力・不安」の中にはいろんなものが含まれていると思います。ですからその内容をもう少し精査しないと、不登校の理由が何か、どう対策したらいいかというのはよく分からないんじゃないかなと思うんです。</p> <p>私が小学生だった頃のことを考えると、不登校自体非常に少なかったですけど、不登校の子はほとんど貧困だったんです。それに対して今の時代、「無気力・不安」が増えているということはどういうことなんだろうと思います。非常に不思議に思うというか、時代が変わったんだからそうだとはいえそうなんでしょうけど、もう少しその理由を突き詰めて分析してみたいという気がします。</p>
<p>須佐美徹 総合支援課長</p>	<p>本当に不登校の理由を明確にしていくということはなかなか難しいところで、いろんな要素があったり、その要素が変わっていったりする場合もありまして、最初はこういう要因で欠席だったのが、変わっていくということもあったり、なかなか特定は難しいんですけど、やはりそれを、いろんなデータの取り方で追跡していくことで、少しでもヒントが得られるように努力していきたいと思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>令和3年度に非常に増えているというのはどうなのでしょう。やはりコロナの影響で学校が休みになったり、あるいは自発的に休んだりしていたりということで、リズムが狂ったという要因もあるんでしょうか。</p>
<p>須佐美徹 総合支援課長</p>	<p>正直申し上げて、本当の理由が分からないところです。探っていきたいと思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>全員に聞いてみたらどうですか。この要因別というのは学校の見立てが書いてあるわけですよね。</p>
<p>須佐美徹 総合支援課長</p>	<p>はい、そうです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>だけど、実際に本人、保護者に不登校の理由を聞けばもう少し分かるんじゃないかという気がするんですけど、そこはどう</p>

		ですか。
須佐美徹	総合支援課長	今のご意見を含めて、少しでもデータを取れるように、やり方も含めて検討させていただこうと思います。
遠藤洋路	教育長	分からないとしても、その中でも本人に聞くというのが一番確実だという気がしますから、そういう検討をしてください。
苫野一徳	委員	不登校の子どもたちについてお尋ねをします。フレンドリーだったりオンラインだったり、様々な対応はされていると思うんですけど、大半が、悪い言い方をすると学習権の行使ができない状態になってしまっていると思うんですけど、それに対して何か積極的な対策をして、そこを何とか支えていこうというようなことがあればお聞きしたいと思います。
須佐美徹	総合支援課長	学習面での支援ということでよろしいでしょうか。
苫野一徳	委員	そうですね。意義、場所も含めてです。
須佐美徹	総合支援課長	フレンドリーはいろんな活動をしたり学習をしたり、今年は教室を2か所増やして、子どもたちがアクセスしやすいような状況をつくっております。 今日、広島県の話も出たんですけど、広島県はSSRというのを使われて、スペシャル・サポート・ルームですね、そういう拠点校みたいなものをたくさんつくられて、そこで選択肢を与えられております。熊本市でもフレンドリー教室を増やすということをやっております。 学校でももちろん授業のオンラインの配信をされたり、不登校の子どもたちが来られる別室で、不登校支援員の先生が学習のサポートをしたり、そのようなことがされております。 オンラインでも、学習支援と社会的な自立の2つを考えて、いろんな学習経験の差がある中でどうすればいいかというところで、「すらら」という学習アプリをオンラインで使わせていただいています。そのアプリで一番よかったのが、学んでいなくてもレクチャー機能がついているので各自が自分のレベルで学習しやすいというところ。あとはNHK for Schoolの動画を配信しながら、その動画も見せっ放しではなくて、途中で切ってやり取りを交えてというやり方をしております。

苦野一徳 委員

す。

また、いろんなところから、熊本城や博物館も対応されているんですけど、美術館、動植物園など、いろんな方のお話を聞かせてもらったりという工夫もしているところです。

今年度は連携協定を結んだInspire Highのプログラムを使いながら、なかなか周りにつなぐことが少ない子どもたちなので、生き方についての考え方などについても提供して支援していこうと思っているところです。

熊本市の姿勢として、不登校支援は子どもたちを学校に無理やり戻すということではなくて、より多様な教育の機会を保障していこうという発想であるということは、とても素晴らしいことだと思っています。それでもやっぱり大多数の子どもたちが支援の網からこぼれ落ちてしまうことがあると思うので、この基本姿勢を大事にしながら、多様な教育機会の確保はかなり努力目標のところがあるので、なかなか自治体として金銭的支援をしていくのは難しいところがあるのかもしれないですけど、そこもひとつ大事にしてほしいと思います。

あと、これはちょっと思いつきみたいなものなんですけど、例えば私の大学のセミナーとかにも結構小・中・高校生が来たりするんです。福岡でも不登校の子どもたちを大学に招くみたいなものがあつたような気がするんです。ユア・フレンドもありますけど、大学生のお兄さん、お姉さんのところだったら行きたい、そういう子どもたちもたくさんいると思いますし、何か今までになかったチャンネルを開拓して、斜めの関係等々も開拓して、より多様な機会が生まれたらいいなというふうな感じがして、その辺ももしかしたら模索する可能性はあるのかなと思います。大学との連携も面白そうだなというふうに思ったんです。またご検討いただけたらなと思います。

遠藤洋路 教育長

私からも1点なんですけど、不登校の数の中には、いろんな方法を含めて出席扱いになっている子どもというのもあると思うんです。この不登校の全員の数のうち、出席扱いになっている、学習を体系的にしているという子どもはどのぐらいいるのでしょうか。

須佐美徹 総合支援課長

昨年度の100日以上欠席の子どもたちが1,183名いるんですけど、その中で別室での学習、学校からの授業配信、

	<p>公的機関、オンライン学習支援、民間施設に行った子どもたちが出席扱いになっていますので、それ以外に一つも丸がない子どもたちは483名いました。その483名が出席していないというふうと考えられます。</p> <p>何らかのかたちで、今の別室での学習、学校からの授業配信、公的機関、オンライン学習支援、フレンドリーのオンライン学習、民間施設等に行った子どもたちは出席扱いになっております。</p>
遠藤洋路 教育長	令和3年度の2,152人のうち何人が欠席扱いになっているのでしょうか。
須佐美徹 総合支援課長	それから483人を引いたらどこともつながっていないというふうになります。
遠藤洋路 教育長	これは100日以上欠席した人が2,100人なんですか。30日じゃないですか。
須佐美徹 総合支援課長	すみません。30日です。100日以上は1,183人です。
遠藤洋路 教育長	では、この30日以上欠席した人のうち何人が出席扱いなんですか。
須佐美徹 総合支援課長	出席扱いになっている人数ですね。すみません、確認いたします。
遠藤洋路 教育長	確認をお願いします。
澤栄美 委員	不登校の原因なんですが、以前はなぜ起きているかという調査だったんです。それが家庭の要因、学校の要因、本人の要因というふうになって、今のこのペーパーになっているんだと思

うんです。その中から1つだけ選べということになっていて、無気力とか不安が多いんですけど、この中の多くは、本当は学力不振の子どもも多いのではないかなと考えるんです。

というのは、例えば今、Specific Learning Disorder、LDじゃなくてSLDとなっていますけど、ある一定のことが非常に不得意な、一部の認知が落ちている子どもが何か授業に違和感を感じながらとか、あるいはコミュニケーションとか社会性に課題を持つ子どもたちがなかなか友達とうまくいかないとか、そういったことが背景にあったりするのかなと思ったときに、先ほどの特別支援とも関係するんですけど、やはり早くにその子たちの困り感を見つけるというのがすごく大事かなと思っています。小学校高学年以後にやっぱり増えるというのは思春期との関係もあるかもしれませんが、ますます違和感とかつらさというのが大きくなっていくからだと思うんです。

私は中学校に勤務したときに、いろいろ心の課題を持っている子どもが、1学年200人だとしたら、180番ぐらいで、毎回その成績をもらうわけです。その成績をその子が毎回もらうことの意味は何だろう、その子を勇気づけることに決してなっていないと思ったりもしていたんです。親御さんがその成績を見たことでまた子どもにつらく当たってということもあると思います。

だから、その子のつらさというのに心を寄せるということが教員の役割かなと思います。なぜ毎回成績が振るわないのか、あるいは成績が押しなべて、4教科とか5教科とか、できることが果たしていいのかというところに立ち返って考えなきゃいけないし、やっぱり得意、不得意の部分をしっかり見極めるようなシステムというのもあるといいよねというのをずっと思っていました。例えば、巡回相談員とかのシステムが熊本市にはありますので、そういったシステムを充実させていただきたいのかなと思います。

例えば隣のクラスは国語の平均点が何点だった、うちは何点だったということで、担任の先生が他クラスと比較してつらく当たってしまう事例もないわけではないと思うので、やっぱり一人一人の特性に目を向けた、子どもがつらくならないような考え方も含めて、そういったことが充実すると、不登校も多少は少なくなっていくのかなと思いました。

須佐美徹 総合支援課長

ご意見ありがとうございます。データの取り方も含めて、なかなか学校に行けない子どもたちに、マイナスのイメージではなくてプラスのイメージを持ってもらえるような取組を今後も続けていきたいなと思います。そのデータの取り方でもちょっと慎重に、子どもたちから本当の声を聞き出せるような関係づくりと、それからその要因を探る部分に取り組んでいきたいなと思います。

澤栄美 委員

どこの調査だったかは思い出せませんが、子ども側から調査したものが過去にあって、不登校の理由として学力不振の割合が非常に大きかったんです。それをNHKが取り上げて、学校側が考えている要因と子ども側・親側が考えている要因はこんなに違うというものがあったんです。

そういったのも参考にされるといいかなと思ってお話ししました。

遠藤洋路 教育長

いじめに関しては、本人や保護者に確認をして、いじめが原因かどうかということを含めて、学校が見立てたわけじゃなくて、聞いている数字がここに出ているわけです。他のところの要因については、聞いている場合もあるんですけど、この調査に関しては、いじめ以外の部分は全部学校側の見立てですよ。

せっかく聞いているんだったら、学校側の見立てはこうですと、あるいは本人や保護者に聞いた結果はこうですと、両方あれば非常に状況が分かりやすいのかもしれないですね。

苦野一徳 委員

今の澤委員のお話で思い出して、これも一案として議論ができたらいいなと思うことなんですけど、神奈川県茅ヶ崎のある小学校が通知表をなくしたということで大きなニュースになりました。有名なのは飯田市立小学校ですが、通知表を出さないことで、子どもたちが言わば自己効力感だったり自己肯定感だったり自己受容感だったりをしっかりと育めるような、そういった学校的に取り組むというのがあります。

私、よく言うんですけど、教育評価の本質って、当たり前ですけど、決して査定することではないんですよ。査定されていると感じた瞬間、自分はここに受け入れられているんだろうかと必ず子どもたちは思ってしまうので、今すぐどうこうできるのか分かりませんが、議論を始めるのは大事だなと思います。

レバリュエーションと呼ぶんですが、バリューという言葉が入っている。子どもたちの価値を見いだして、そしてフィードバックし、フィードフォワードしていく、これが教育評価の本質で、断じて査定することではないので、そういうことを各学校で考えていくという時期がもしかしたら来ているのかもしれないですね。

本当の意味での教育評価の本質に立ち戻って、どうやって子どもたちのバリューを見いだしてフィードバックし、フィードフォワードしていける教育評価ができるか、これができる子どもたちにとって、よりもっと過ごしやすい場所になるかもしれないと思います。

中学校でもそういうことができるかどうかは、また難しいかもしれませんが、そういった価値観や考え方を先生方みなで議論していくというのは必要なことかもしれないと、澤委員の話聞いて思いましたので、案としてどこかに留めておけたらいいなと思いました。

西山忠男 委員

今の苦野委員のご意見、確かにそれは一理あると思うんですけど、一方で、自分の成績がどれくらいなのか分からなくなるという不安が出てきますよね。そうすると塾に走る子が増えるような気がします。一番難しい、悩ましい問題ですね。そういう感想を持ちました。

苦野一徳 委員

1とか2とか3とかやる必要はないよねという感じなんですよ。レバリュエーションなりアセスメントがあって、アセスメント、子どもたちの今の現状がどうなのかというのを見取って、それをフィードバックしていくときに、子どもたちが今はどういう理解度であったり到達度であったりというのを、フィードバックを通して子どもたちは理解するわけですけど、それを1だとか2だとかというふうに3段階や5段階で評価して、ああ、自分は1なんだ、ずっと1なんだということをして、子どもたちをずっと査定して自信を過度に失わしめる必要はないだろうということです。

だから、通知表という形で出すというのは、何かフィードバックするような形式の評価スタイルだったり、そういう様々な工夫はできると思うので、そういったことも考えていったらいいんじゃないかなという感じです。

遠藤洋路 教育長

今はタブレットが1人1台になっていますので、多分本来はテストも要らないし、通知表もなくとも学習記録を全て見れば分かるということになるのかもしれませんが、今はまだそこまでいっていません。ICTを使って何か通知表以外の形で到達度を見るという方法もあるのかもしれないです。

常に1人1台タブレットを持ってそこに全ての学習が記録されるという状態が、今後、5年とか10年とかで生まれていくのではないかなと思います。テストとか評価の方法というものも変わってくるんだろうと思います。熊本市で先進的にそのような実験をするということもあり得るかもしれないですけど、今すぐ何ができるかというのはちょっと分かりませんので、またそれは考えていきたいなというふうに思います。

また、西山委員がおっしゃるように、全く状況が分からないというよりは、むしろ通知表の1とか2というのはかなり大ざっぱな評価であって、もっと細かく丁寧に把握できるようになるんじゃないのかなと個人的には思います。

他によろしいでしょうか。

では、他になければ、本件は以上といたします。

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

本日の会議日程は全て終了いたしました。これで、令和4年5月定例教育委員会会議を閉会いたします。